

御坊さん

お晨朝

真宗の風景

朝六時に梵鐘が響き、大門の環貫が抜かれます。お内陣の十枚のお扉が開かれ、輪燈に明かりが入り、燭台にお蠟燭が灯されます。お香が焚かれ、お仏飯が上卓に供えられます。

午前七時すぎ、朝の静寂を打ち破るかのように行事鐘が連打されます。いよいよ晨朝勤行の始まりです。そのころには近隣の方々が数名外陣に着座されています。行事鐘の最後三打をもって、内陣の鑿が二音、調声の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」が発音されると正信偈の唱和が本堂に響き渡ります。

本堂勤行の後、蓮如堂で讃仏偈、法話の後、内道場で重誓偈をもって終わります。このようにして本徳寺の一日が始まります。毎日毎日、雨の日も風の日も、三六五日休むことなく勤められます。

正信偈・和讃の繰り返しは、蓮如上人によつて始められた本願寺独特の作法です。親鸞聖人のお言葉を自ら発音し、この声を聞いて一字一句かみ締めることができます。何度聞いても新しい趣があります。ことに名号を称えさせていただくときの充実感や文で言い表すことが出来ません。

年刊 『御坊さん』 第11号

平成 19年 8月

発行 亀山本徳寺・本徳寺廟所墓地管理部

姫路市亀山三三四・235-0242

編集 亀山本徳寺・真宗文化研究室

最後に、回向句を称えさせていただいき、今日一日娑婆世界で生きる自己の意味を新たにすることが出来ます。この一連の勤行に浄土真宗の聞法の一部始終が籠められていることにつくづく感心します。

このお晨朝にいつも参加される方の中に光照寺の門徒である高橋さんと徳円寺の門徒である土居さんがおられます。この度、無理を言つて紙面で日頃の心境を語つていただきました。

蓮如上人は御文章のなかで門徒に「物言え物言え」と勧めておられます。また「もの言わぬは恐ろしきことなり」とまでおっしゃつておられます。

いただいた信心を披露することによって、人からいろいろ批判されます。批判は大切なことです。時として誤解や自分の勝手な解釈に安住していることがよく有ることからです。

法義談合して始めて人から教えられ、また人に伝えていく事の大切さを蓮如上人はよくよくご存じであつたに違いありません。

(真宗文化研究室・大谷)



6月24日・朝市の日のお晨朝 於蓮如堂

お寺で教わったこと

高橋 啓之

はじめに

私と亀山御坊・本徳寺とのご縁は、退職し日課とした朝の散歩の途中、皆さんがお朝事(晨朝勤行)にお参りされるのを見て、はじめて本堂に上がり読経と法話を聴く機会を得て以来、早五年になります。

正信偈に続いて「仏説阿弥陀經」が読誦されますが、インド伝来の仏教聖典を流麗な漢文に翻訳した姚秦(ようしん)三蔵法師鳩摩羅什(くまろじゅう)の物語が、NHK番組「新シルクロード」で放映されたことがあります。テレビを見て、仏陀の教え(原始仏教)は、鳩摩羅什三蔵法師等の翻訳者が、彼らの智慧・思考を加え追加・編集しており、内容が変わることもあるのではないかと考えてきましたが、ある書物によれば、「仏説無量壽經」の下巻にインドのサンスクリットの原典に近い部分があり、中国で創作され付け加えられ孔子の儒教や老荘思想に基づく教えが書き込まれているとのことでした。

昨年夏、中国の北西辺境・新疆(西域)のタクマラカン砂漠(その細かい砂粒は黄砂となつて四千km離れた日本へ飛来する。)縦断旅行に参加する機会があり、鳩摩羅什三蔵法師の出身地・庫車(クッチャ・旧亀茲國の中心都市・天山南路に位置する)を訪ね、台座に立つ半跏思惟の鳩摩羅什ブロンズ像と背面の岩

山にあるキジル石窟で仏教壁画（製作は紀元三世紀に遡る）を見学することが出来ました。

彼の訳経によって、インドに興った仏教が、遠く中国・朝鮮を経て東の果て日本に到来し、とりわけ我が国では聖徳太子が仏教の普及に努められ、後の親鸞聖人が太子を「和国の教主」とたたえ、在家仏教を今に伝えていることを考えると、毎日の阿弥陀経読誦のなかに、はるか二千年に及ぶ連綿とした仏教伝搬の歴史をかみ締める思いがします。

仏教を教わる

近年、社会が急速に変化し、親から子へ、子から孫へ大切なものが伝わらなくなり、それは人々の心の荒廃の要因となつていると思えます。この様な家庭環境の崩壊を見るにつけ、私には幼少の頃から、仏間で家族揃つて唱えた、「帰命無量寿如来 南無不可思議光・・・」、あの正信偈の読誦の声と節回しはこの年になつても懐かしく思い出されます。

当時は、一節にある「難中之難無過斯 印度西天・・・」と言うところを、「昔、インドの・・・」と思ひ込んでいましたが、正しくは「信心ずること、は、難しい中でも最も難しい事柄で、インド・中国・日本の高僧が分かるように明らかにして下さっています」と言う事でありました。

このように、お経の意味内容は全く理解出来ていませんでしたが、門前の小僧よろしく、浄土真

宗の教義を知らぬままに声を上げていたのです。

私は年を取つてからそれを知る機会をいただきました。お経の内容・意味の説明を受け、知る喜びを得て、繰り返し聴聞することにより、仏の教は、「如来の本願により、煩惱具足のまま、仏と成らせていただく」と言う有り難い教えである事を教わつたことは幸いでした。

このところ良く耳にする、「現生正定聚げんしんしょうじょうじゆ」、難しい仏教専門用語ですが、「今現に私が救われている」と言う浄土真宗にとつて一番根本の事柄ですが、お経から導かれる難解な教学用語が、いつのまにか權威の衣をまとい、かえつて人々を仏教から遠ざけてい

「他力本願」の教え

仏教は、二千五百年も前、インド人の深い思索と体験から生まれ、人の深層心理に光を当てて熟考された思想です。現代では、いわゆる深層心理学・哲学領域とも関連するものであり、これらの知識をもつては、なかなか理解しがたいようです。

幸い、我が国では、天才の宗教者、法然・親鸞が、「他力本願にて救われる」との釈迦の教えを、インド・中国の高僧の解釈を抛りどころに、「經典」の中に見出され、我々を導き、伝えられました。

私達は、修行を条件とすることなく、最初から「後生の一大事」を仏縁により気付かせていただき、他力の信心に目覚め、人生の有り難き事実を知つて、本当に安らかな日日を感謝のうちに送ることが出来る

きることを教えられました。

過日、姫路文学館で開催された「新美南吉・ゴンギツネの世界展」(註記②)を機会に新美南吉童話の世界を再読しました。皆様も国語の教科書で読まれたことでしょうか、ほんの一昔前、ごく普通に見られた日本の庶民感情・生活に、素朴で善良な人物が人生の真実の姿を描き出し、明るさの中にほのかな悲しみを書き上げていて、仏様と一緒に生きていたのだなあと思うことでした。

彼の童話「百姓の足、坊さんの足」の中で、次の言葉を前置きにして、死後の極楽と地獄の別れ道の旅路を行く物語を綴つてあります。『さて、ここまで私は元氣よく話して来ましたが、これから先の話をするのは気がすまないのです。あなたがたが信じてくれないだろうと思うからです。信じてくれないだけならいいが、ばかばかしくなつて笑いだすのじやないかと思うのです。しかしまだ話は終わっていないのですから、ここでやめてしまふわけにはいかないであります。』：「後生の事」は知識ではなく、計らいを交えない心、純粹な気持で、単純、素直に向かい合うことが必要なことと思ひます。「信心」は毛穴から心の深みにしみ込むのだと言われています。

おわりに

浄土真宗の教えは、八百年の時を経て、現代社会にあつては、そのまま取り込めるには困難さも有りますが、正しい教えに遭うことを怠つてはならないことです。

「若いから」「暇がないから」「まだ早いから」と言つて、遠ざけてはならないことです。

聴聞は急げ急げです、そして聞くときは、ゆっくりゆっくりと聞き締めて聴聞することとの教えでもあります。

人間を中心に考え、神仏に疑問を持つ今日の社会を考える時、浄土真宗の教えは非常に重要であります。いくら世の中が変わろうとも、決して変わらないものが、阿弥陀如来の本願です。智慧と慈悲に包まれて、敬い・支え合う人間関係を築き、本当の幸せと、心豊かに力強く「命輝く人生を」行く、歩むべき道は示されているのです。報恩感謝のお念仏の日暮を致したいものです。

仏教の中庸の思想が、争い事の絶えない、これからの家庭・国・世界を救う大きな力になると考えています。

注記① 鳩摩羅什 (西暦344～413)

中国南北朝時代の代表的な訳経者の一人、インド人を父とし、亀茲国王の妹を母として亀茲に生まれる。四〇一年長安に至り「法華経」「阿弥陀経」：等三十五部を漢訳。そのほか維摩経の注釈が遺る。経論四〇〇巻をインドの言葉から中国語に訳した。あの西遊記の玄奘(600～660)の翻訳を新訳と呼ぶのに対して、羅什のそれを旧訳という。

注記② 新美南吉 (1913～1943)

知多半島 半田市に生まれ、わずか二十九歳八月の若さで亡くなった童話作家。

没後にその遺稿が発表されるにょよんでその声価は高まった。

お晨朝に参拝される著者の高橋さん
於蓮如堂



私と亀山本徳寺

土居 正樹

私は生まれも育ちも姫路ですが、仕事の関係で長い間横浜で生活しておりました。ちょうど今から二十二年前に父親を病気で亡くしました。父には定年になりこれからゆつくりと老後を楽しんでもらおうと思っていた矢先のことでした。

当時、横浜にいた私は、父の法事にせめてお経のひとつくらいあげられなければと思い、家の近くのお寺で教えてもらうため電話をしたところ、「毎朝お勤めをしているので気軽に来てください」との返事でした。さっそく土曜日・日曜日にお寺へ行きました。

お寺では正信偈をあげ歎異抄を拝読し、ご住職のお話を聞くというコースでむつかしい部分も多々ありましたが、回を重ねるうちにお経のあげかたもなんとなく親しめるようになりました。アットホームな雰囲気です。浄土真宗のさわりを勉強させていただきました。

亀山本徳寺もそうですが夏も冬も祭日も休みなく朝七時から約一時間晨朝勤行が行われます。二年間鎌倉組の連続研修にも参加させてもらい、お経だけではなくいろいろなことを体得することができました。結局十年以上お世話になりました。そのお寺は横浜市戸塚区にある浄土真宗本願寺派の成正寺です。ご住職はじめ坊守りさんにも大変よくしていただきました。

この時代にも目には見えませんがいろいろ得ることがいっぱいあったように思います。父が亡くなったことがご縁でなかなか得ることがむつかしい仏縁をいただきました。横浜で生活していたわけですが、今から十数年前いろいろなご縁から帰郷して姫路で生活することになりました。おかげさまで新たな仕事も姫路で見つかりました。

横浜時代、早朝にお寺へ参る習慣がついていた私は帰省後その機会が少なく少し淋しい思いをしておりました。ちょうどその頃、公民館で亀山本徳寺の大門修理が完成し説明会と見学会があることを知り、お寺と古い建物に関心を持っていったこと、小さい時、本徳寺の隣にあつた親戚へよく遊びに行っていた頃の本徳寺の記憶がよみがえり数十年ぶりの懐かしさを感じながら説明会に参加しました。専門家の話やご住職からの詳しい説明を聞き、実際足場に登り江戸時代に建てられた現物を手にとるように拝見し、昔の貴重な建物、文化財、技などに感動したことを覚えています。

それともうひとつ嬉しかったことは、ご住職から最後に「毎朝お経をあげているのでいつでも遠慮なく来てください」とのお話を聞いたことです。長いこと早朝お

寺に参る習慣がなくなっていたことと、親戚の法事ではお東が多く、どちらかといえば、東へ東へつられていくようなので、お西のお経をあげたいと思っていたところでした。さっそく休みには亀山本徳寺へお参りするようになりました。

朝七時からお勤めが始まります。六時半に起き車でお寺へ向かい境内に車を止め、庭から壮大な本堂を見上げながら三百畳もある堂内に入ると、西本願寺に勝るとも劣らない素晴らしい荘厳がしつらえてあります。ご本尊も安置されています。その前に座っているだけでも、すばらしい仏さま・文化財の前で心ゆたかな心境になります。

また、特に秋から冬にかけて朝の陽の光が堂内に射し込みますが、更に芸術的な、また神秘的な、すばらしい雰囲気となります。また、本堂でご住職のリードで参加者全員が正信偈と仏説阿弥陀経をあげます。その後、隣の蓮如堂に移り讚仏偈(仏説無量寿経)をみんなであげます。どちらにしてもキリスト教でいえば讚美歌のように、みんなであげられるお経は、自らも大きな声を出しながらまた、みんなのお経を聞きながら一体感にひたり、独特なすばらしいハーモニーに心豊かな気分になっている自分を発見します。最後に蓮如堂でご住職の法話があります。毎日異なった話題や、和讃の解説をもとに心に残る数々のお話を聞くことができます。

以前、ご連枝様からは『あり得がたいことがありがたいこと、お参りできる身体、気持ちがありがたい。それぞれがご縁となって結ばれる。当た

り前のことがありがたいこと。最後に頼れるものは念仏』(2004/6/26)『人を嫉みいやしい心をもつ私、救われようのない私でも、必ず救う、救いたいんだ、救われないんだ・・・弥陀の本願・・・唱えさせていたたく身にあなたがしてくださった。本当にあてになるのは誰か、浄土真宗のご縁があった。弥陀の本願しか頼りになるものはない。必ず頼りになる。救いたいんだ。救われたいんだ・・・』(2005/1/19)などの貴重な話をいただきました。

また、ご住職様からも常に『自分のいのちについて考えよう、いのちを明らかにしよう』『自分はどこからきてどこへ行くのか』お朝事は『いのちをおがみあう』『いのちを学び合う』『いのちを明らかにするものである』声を出し、味わいながら聞く。自分のいのちを参考にしながら・・・。(2007/6/24)などいつも新鮮な感覚でいろいろ教えていただく場を、また考える場を与えていただき感謝しております。

亀山本徳寺は広い境内に並び立つ蓮如堂はじめ諸堂や門、塀など平成十年から始まった平成の大解体修理工事が平成十六年に完成し、五月に落慶法要が営まれました。そのとき稚児行列がおこなわれ、横浜に住んでいた私の孫もお願いして参加させてもらいました。参加して本当にうれしく思いました。本人はまだ分かりませんが、こんな小さな時から得がたい仏縁をいただき決して忘れないと思います。貴重な体験をさせていただき本当によかったなと思っております。何十年いや何百年に一度しかないこの貴重な機会に家族ともども参加させてもらったこと、ご縁をいただいたことは

何ことにも変えることができない喜びと感謝しております。

広大な境内には多くの木々があり春夏秋冬、四季折々の花が咲き、新緑や紅葉など一年をとおして自然豊かな美しさがあります。ある年、サツキがあまりにもきれいに咲いており『ほんまにきれいやな』と思っていたら朝のお勤めが終わって帰ろうとしていたところ、奥様から、きれいに咲いているさつきを觀賞しながらお茶をたてていただき、このような美しい世界があることを肌で感じました。・・・なんと贅沢なひと時か・・・！いつも感謝しています。時代が進めば進むほど『こころ』のことが重要になるように思います。こういうときにこそ、心の豊かになるきっかけをつくってくれるお寺が必要だと考えます。

せっかく歴史と伝統のある格調の高い亀山本徳寺が私たちのすぐ近くにありまして、大いに利用させていただきます。孫が我が家に来た時には山陽電車に乗って一緒に本徳寺へ行くのが楽しみです。今では亀山本徳寺は私の生活の一部であり、どんなに忙しくても時間の許す限り門をくぐろうと考えています。生・老・病・死、誰でもいつかは必ず限りがあります。今あることのあることがたさに感謝し、更に自分を磨くため精進したいと考えています。

七月七日お晨朝の後
蓮如堂で合掌
される土居さん。

